

ま ま した い せき
マ マ 下 遺 跡

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

ま ま した い せき
マ マ 下 遺 跡

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

序

私たちの飯田市は、中央アルプスと南アルプスに挟まれた伊那谷の南部に位置し、古くから交通の要所として栄えてきました。そして、美しい自然に恵まれ、長い歴史と貴重な伝統文化に包まれた、人情豊かなまちとして知られています。

ママ下遺跡が存在する上郷地区は、飯田の中心市街地の北側から東側にかけての郊外にあたります。元来は農業を基盤とする地域でありました。しかし近年は、飯田市街地に近いことや国道153号線、県道飯島飯田線バイパス等が通過していることなどから、宅地や商業地として発展し、その姿を変えつつあります。この発展は、道路網の整備と車社会の発達によるところが大きいといえますし、こうした中で、さらに車社会の充実を推し進めることは、自然の成り行きといえましょう。

計画地一帯は埋蔵文化財包蔵地「ママ下遺跡」の一画にあたります。埋蔵文化財は文字どおり地下に埋もれているため、なかなか身近に感じられることが難しいかと思えます。しかし、埋蔵文化財は私たちの祖先の足跡を示しており、この地の歴史を雄弁に語ることができます。このような文化財は、一度壊すと二度と元通りにすることはできません。できる限り現状で保存するのが最善といえますが、現代社会の基盤整備との間では記録保存により後世に伝えることもやむを得ないことと考えております。

今後、本書が広く活用されるとともに、地域の皆様に歴史と文化財が身近に感じられるようになれば幸いです。

最後になりましたが、文化財保護にご理解を賜りご協力いただきました、株式会社 甲信マツダ様に、深甚なる感謝を捧げまして発刊の辞といたします。

平成20年3月 飯田市教育委員会

教育長 伊 澤 宏 爾

例 言

1. 本報告書は、工場建設に先立ち実施された、飯田市上郷飯沼1420-1他所在の埋蔵文化財包蔵地ママ下遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社 甲信マツダ 代表取締役 廣川和宏の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、渋谷恵美子・羽生俊郎が担当した。平成18年度に現地調査を、平成19年度整理作業および報告書作成作業を行った。
4. 調査時の図面類・遺物の注記には、「MMS1420-1」の記号、遺構には以下の記号を用いた。
SK：土坑、SD：溝址、SX：不明遺構
5. 本遺跡に於ける発掘調査位置は、飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図の区画、Ⅷ-1c 75 12-6(社団法人日本測量協会 1969「国土基本図図式 同適用規定」参照)およびⅧ-1c 75 12-14に位置する。グリッド設定は飯田市新埋蔵文化財基準メッシュに基づいて、有限会社M2クリエイションに委託した。
6. 土層観察については、小山正忠・竹原秀男 2005『新版標準土色帖』による。
7. 遺構・遺物の計測値のうち、未調査、破壊・破損等の数値は現存値を()内に示した。
8. 遺構実測図の線については、上端は太線、下端は細線、破線は推定のライン等を表現している。
9. 遺物実測図におけるスクリーントーンは、剝離・欠損等を表現している。
10. 本書は担当者協議の上、羽生俊郎が執筆・編集し、山下誠一が総括した。現場での遺構写真は羽生俊郎が撮影し、遺物写真については、西大寺フォト 杉本和樹に委託した。
11. 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

目 次

本文目次

序	第2節 歴史的環境……………5
例言	第Ⅲ章 調査の結果
目次	第1節 調査地……………7
第Ⅰ章 経過	第2節 基本層序……………7
第1節 調査に至る経緯と経過……………1	第3節 遺構……………9
(1) 調査に至る経緯……………1	(1) 溝址……………9
(2) 調査の経過……………1	(2) 土坑……………10
(3) 作業日誌……………1	(3) 小穴……………12
第2節 調査組織……………2	(4) 不明遺構……………13
(1) 調査団……………2	第4節 遺物……………13
(2) 事務局……………2	第Ⅳ章 調査のまとめ……………16
(3) 指導・協力……………2	主要参考・引用文献……………17
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	抄録……………24
第1節 地理……………3	

挿図目次

挿図1 遺跡位置図……………4	挿図6 土坑08～22……………11
挿図2 調査区位置図……………6	挿図7 小穴……………12
挿図3 基本層序……………7	挿図8 不明遺構02・03……………14
挿図4 調査区全体図……………8	挿図9 出土遺物……………15
挿図5 溝址08～11……………9	

写真図版

図版1 調査区(北側)・同(南側)・ 溝址08……………19	図版4 不明遺構02・03・小穴……………22
図版2 溝址09・11・土坑09……………20	図版5 作業風景・出土遺物(石皿)・ 同(石鏃)……………23
図版3 土坑15・17・22……………21	

第 I 章 経 過

第 1 節 調査に至る経緯と過程

(1) 調査に至る経緯

平成18年4月7日付け、長野市中御所1丁目27番地22号 株式会社 甲信マツダ 代表取締役 廣川和宏より、文化財保護法第93条第1項による「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。当該計画地は埋蔵文化財包蔵地 ママ下遺跡内に位置する。ママ下遺跡は弥生時代から平安時代にかけての集落址として周知されており、当該計画地隣接地では古墳時代後期から平安時代を中心とした遺構が分布していることが把握されている。当該計画地でも同様の埋蔵文化財の状況であることが予想されたため、工事に先立っては記録保存のための発掘調査を実施する必要が生じた。本調査実施に先立っては、予備調査を実施し、発掘調査計画立案と費用積算を行なうこととした。

平成18年4月10日付けで、株式会社 甲信マツダ 代表取締役 廣川和宏と飯田市長 牧野光朗との間で「飯田市ママ下遺跡 予備調査業務委託契約書」を締結し、平成18年4月18日、これを実施した。その結果、竪穴建物址・土坑とみられる遺構等が確認された。また、遺構検出面は基礎の深度よりも浅く、計画地全体を対象とした発掘調査が必要であることが確認された。

これを受け、平成18年4月25日付けで、株式会社 甲信マツダ 代表取締役 廣川和宏と飯田市長 牧野光朗との間で「飯田市ママ下遺跡(平成18年度)発掘調査委託契約書」を締結し、本調査を実施することとなった。

(2) 調査の経過

以上の経過を経て、平成18年5月8日より現地の発掘調査に着手した。現地は駐車場として利用されていたため、舗装と表土の除去を重機で行なった。排土の都合で重機作業を2回に分けて実施した。その後、実測に必要な基準点の設置をM2クリエイションに委託し、人力により遺構の検出・掘削・実測作業等を行なった。埋め戻しの重機作業を含めて現地作業を5月30日に終了した。

平成19年度は飯田市考古資料館において、図面・写真類の整理、出土遺物の実測等の作業を行ない、報告書刊行を行なった。

(3) 作業日誌

5月8日	路盤解体除却作業。	5月16日	重機作業。
5月9日	重機作業、基準点設置。	5月17日	作業中止。
5月10日	資材搬入、遺構検出・掘削作業。	5月18日	雨天中止。
5月11日	雨天中止。	5月19日	雨天中止。
5月12日	遺構検出・掘削・実測・写真撮影。	5月22日	遺構検出・実測。
5月15日	遺構検出・掘削・実測・写真撮影。	5月23日	遺構掘削・実測。

5月24日 遺構掘削・実測。

5月30日 重機作業。

5月25日 機材搬出。

第2節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長	伊澤 宏樹		
調査担当者	澁谷恵美子 羽生 俊郎			
調査員	下平 博行 坂井 勇雄			
発掘作業員	小島 康夫 佐々木政充	杉山 春樹 竹本 常子	中村地香子	
	服部 光男 福沢トシ子	松下 省三 三浦 照夫		
整理作業員	小平まなみ 福沢 育子			

(2) 事務局

飯田市教育委員会				
教育次長	中井 洋一(平成18年度)	関島 隆夫(平成19年度)		
生涯学習課長		小林 正春(平成18年度)		
生涯学習・スポーツ課長		宇井 延行(平成19年度)		
生涯学習・スポーツ課長補佐		竹前 雅夫(平成19年度)		
文化財保護係長	馬場 保之(平成18年度)	山下 誠一(平成19年度)		
文化財保護係	宮澤 貴子 澁谷恵美子	下平 博行 坂井 勇雄	羽生 俊郎	

(3) 指導・協力

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理 (挿図1)

飯田市は、長野県の南部を並走する中央アルプスと南アルプスに挟まれた、俗に伊那谷と呼ばれる伊那盆地の南部を中心とし、平成17年10月1日に上村・南信濃村の2村と合併したことにより、赤石山地と伊那山脈に挟まれた遺山郷と呼ばれる地域も含んでいる。

伊那谷は南北に約100kmと長く、中央を天竜川が南流する。北は諏訪地方・塩尻地方に、南は天竜川と秋葉街道伝いで遠州地方に、西は神坂峠や矢作川伝いに三河地方へそれぞれ通じており、長野県の南の玄関口といえる場所にある。このような地理的条件から交通の要衝といえ、多くの街道が飯田を通過し、また起点としている。伊那街道は明治以降三州街道と呼ばれ、現在の国道153号線となり、下街道は現在の国道151号線となり、秋葉街道は現在の国道256号線及び同152号線が該当する。また大平街道は県道 幸助・飯田線が該当し、中山道へと通ずる。いずれも中世末期から近世にかけて整備され、現在の路線となった。

伊那谷には、天竜川の両岸に国内でも有数の段丘が形成されている。伊那谷の形成は、約250万年前に天竜川が流れ始めたことから始まる。約200万年前から赤石山地が隆起を始め、続いて約80万年前から中央アルプス・伊那山脈が急激に上昇を始めた。この上昇は山地と沖積地の間に逆断層を形成させ、幾重もの段丘を発達させた。この段丘は伊那谷の地形的特徴であり、地質学上では、火山降下物の堆積を基準として、高位面、高位段丘・古期扇状地、中位段丘・中期扇状地、低位段丘Ⅰ・新期扇状地、低位段丘Ⅱの5つに大きく編年されている(下伊那地質誌編纂委員会 1976『下伊那の地質解説』)。一般的には俗に上段と呼ばれる高燥地と、下段と呼ばれる低湿地に大別される。これらの段丘は、天竜川に注ぎ込む支流の作用により、田切地形や扇状地、自然堤防などを形成するため、さらに複雑な地形となる。

ママ下遺跡の所在する上郷地区は、飯田市街地の東側に隣接し、東は天竜川、南は野添川、西は中央アルプスの前山の稜線、北は土曾川により囲まれた地区である。当遺跡は下段に位置し、西に比高差80m前後の段丘崖を背負い、東南には比較的広い湿地帯を控えた、北側に隣接する土曾川の自然堤防上に立地している。調査地点の標高はおよそ434mである。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12℃を超え、2月の平均気温は1.4℃、8月の平均気温は24.4℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示す。一方降水量は年間雨量約1600mm、梅雨と台風シーズンにピークを迎え、冬には少ない。

こうした地理的・気候的条件により、飯田・下伊那地方(以下、飯伊地方と略す)には暖地性から高山性まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帯性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なっている。



挿図1 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

飯田市の初源は、少なくとも旧石器時代初頭まで遡ることができる。しかし、旧石器時代から縄文時代草創期にかけての飯田市は遺跡数が少なく、様相は不明な点が多い。上郷地区も同様である。

縄文時代に入ると、河川に面した低位段丘上に草創期の遺物が散在し、その後、西側の山麓周辺に遺跡が集中し、時期が下るとともに台地先端へと遺跡の分布が広がる。中期に入ると爆発的に集落が増加し、地区内のほぼ全域に遺跡が分布するようになるが、後期から晩期にかけては遺跡数が極端に減少し、河川に面した低位段丘に遺跡が分布する特徴がある。

弥生時代では、矢崎遺跡から東海的な条痕文系土器が出土しており、稲作の萌芽期にも人々が居住していたことが推測されるが、弥生時代前期の遺跡数は少なく不明瞭な点が多い。稲作の定着したといわれる弥生時代中期に入ると遺跡数が増加し、下段の低湿地に面した位置に集落が営まれる。後期に入ると下段の集落はさらに発展し、上段の高燥地にまで集落が広がるようになる。段丘崖下や扇端部付近で発達する湧水や、小河川を利用した水田耕作や台地上の畑作が生活基盤であったと推定される。

古墳時代中期後半から後期にかけて、飯田市内には多数の古墳が築造される。市内古墳の特徴として、馬具・馬の墓墳が多く出土していることがまず特筆される。こうした馬に関する遺物・遺構の豊富さから、牧を生産基盤とした集団の存在が推定されている。上郷地区においては燬滅したのも含めて35基が確認されており、多くは別府地籍の台地の端部から緩斜地に立地する。特に県史跡である飯沼天神塚古墳や溝口の塚古墳は伊那谷を代表する古墳である。しかし、当遺跡は座光寺地区に隣接しているため、上郷地区の主要な古墳群よりも、土管川周辺にまとまる円墳の一群の方が、地理的に近い。

奈良時代、座光寺地区の恒川遺跡群では正倉城等が確認されており、古代伊那郡衙に比定されている。恒川遺跡周辺には当該期の集落が点在し、官衙と周辺集落を考察する上で注目すべき地域である。当遺跡の南側に隣接する堂垣外遺跡では、当該期の遺構が多数調査されており、官衙に関連する集落との位置付けがなされている。

当遺跡周辺は、文献により古代には伊那郡麻績郷に含まれていたとみられ、中世には郡戸荘であった。郡戸荘は、平安時代末期には近衛家の所領であったが、中世後半期の様相は不明な点が多い。応仁(1467～1469)から文明(1469～1487)にかけては、知久氏と坂西氏が交代で地頭となったが、文明10年(1487)以降は知久氏が地頭となっている。

上郷地区に関する飯沼氏・黒田氏に関しても、応永7年(1400)の大塔の戦に参加した伊那衆、永享12年(1440)結城合戦の結城陣番帳に両者の名前がみられるのみで、詳細は不明である。飯沼氏は現在の飯沼諏訪神社の地に、黒田氏は現在の原ノ城の地に城を構えたものと推察され、両氏は西面の坂西氏と共に、北面の座光寺氏・天竜川対岸の知久氏と対峙したと思われる。こうした群雄割拠の戦国期であるが、武田氏の伊那谷侵攻とともに地方豪族の勢力は減退し、飯沼氏は滅亡したと言われている。

その後、織田・徳川・豊臣氏の統治を経て、上郷地区は近世において堀家が藩主を務める飯田藩の所領となった。この時代、松川を境とし、以北の13ヶ村を上郷(かみごう)とし、松川以南の16ヶ村を下郷と呼び、それぞれ郷代官を置いて統治した。これが現在の上郷(かみさと)の呼称の始まりである。

明治22年(1889)、上郷村が誕生し、平成5年、飯田市と合併し、現在の行政区分となった。



挿図2 調査区位置図

第Ⅲ章 調査の結果

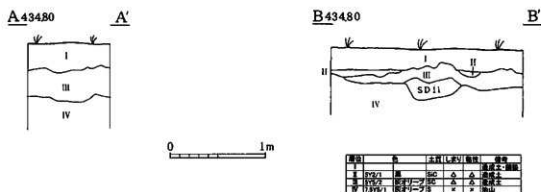
第1節 調査地 (挿図2)

調査地は飯田市上郷飯沼1420-1、調査前は駐車場であった。調査は208㎡を実施した。発掘調査位置は、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図による区画、Ⅱ-L c75 12-6、およびⅡ-L c75 12-14に位置する。

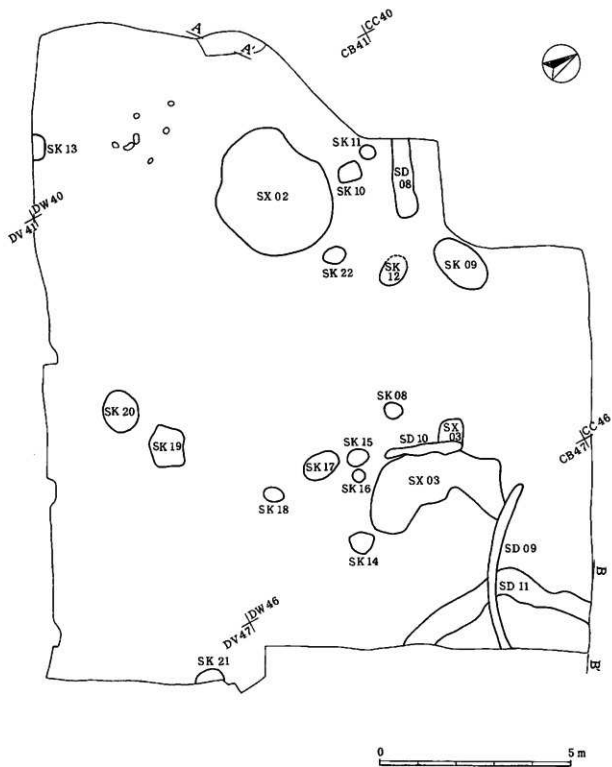
第2節 基本層序 (挿図3)

駐車場として舗装されていたため、20cm程度のコンクリート舗装の下に、造成土が5~40cm堆積する。地山は、造成土の下に堆積する灰オリーブ色の砂層であり、地山の上面が遺構検出面である。

駐車場の整備以前に造成が実施されたようで、調査区北側では地山上面に重機の爪痕が確認された。今次調査区の南側は傾斜しており、低い場所では湿気を多く含む。今次調査区を境として、南東側は湿地化していくものとみられる。



挿図3 基本層序



挿図4 調査区全体図

第3節 遺構 (挿図4)

(1) 溝址(挿図5 図版2)

溝址08(SD08)

CB-42を中心に位置する。規模は延長(230)cm、幅56cm、深さ22cm、主軸はN108°Wを示す。ほぼ直線状の平面を呈し、断面は浅い台形である。西側で調査区外にかかる。

溝址09(SD09)

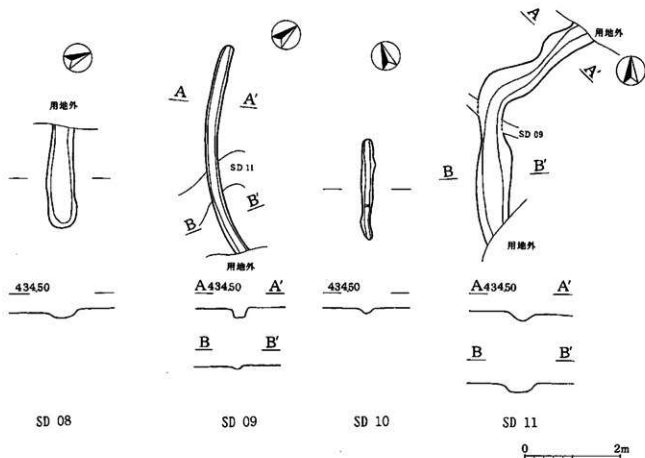
CA-47を中心に位置し、規模は延長(450)cm、幅30cm、深さ20cmを測る。弧状に湾曲した平面形を呈し、断面形は台形である。11号溝址を切り、東側で調査区にかかっている。

溝址10(SD10)

CA-46を中心に位置する。規模は延長207cm、幅25cm、深さ11cm、主軸はN20°Eを示す。ほぼ直線状の平面を呈し、断面は浅いU字状である。

溝址11(SD11)

DY-48を中心に位置し、規模は延長(520)cm、幅68cm、深さ53cmを測る。平面形はくの字状に途中で折れ、断面は浅い台形である。9号溝址に切られ、南北両端は調査区にかかっている。



挿図5 溝址08~11

(2) 土坑(挿図6 図版2～4)

土坑08(SK08)

DY-45に位置し、45×43cmの円形を呈し、深さ14cmを測る。

土坑09(SK09)

CB-44に位置し、163×96cmの楕円形を呈し、深さ43cmを測る。

土坑10(SK10)

CA-42に位置し、56×46cmの不整形で、深さ24cmを測る。

土坑11(SK11)

CB-42に位置し、45×40cmの円形を呈し、深さ5cmを測る。

土坑12(SK12)

CA-43に位置し、85×60cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。一部攪乱を受ける。

土坑13(SK13)

DW-40に位置し、68×(37)cm、深さ11cmを測る。およそ半分は調査区外である。

土坑14(SK14)

DX-46に位置し、60×55cmの不整形で、深さ18cmを測る。一部攪乱を受ける。

土坑15(SK15)

DY-45に位置し、55×45cmの楕円形を呈し、深さ21cmを測る。

土坑16(SK16)

DY-45に位置し、34×34cmの円形を呈し、深さ17cmを測る。

土坑17(SK17)

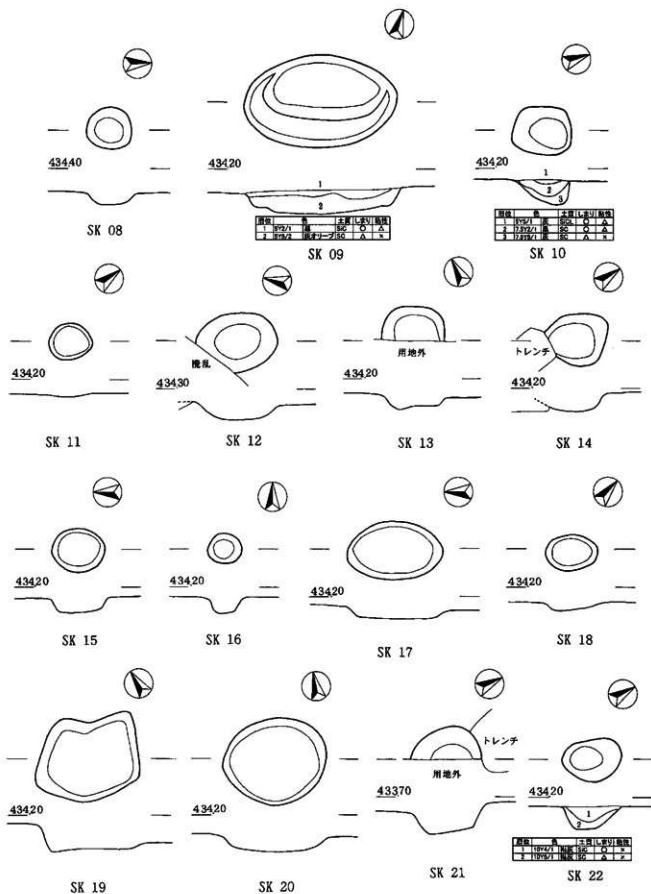
DX-45に位置し、100×63cmの楕円形を呈し、深さ12cmを測る。

土坑18(SK18)

DX-45に位置し、54×38cmの楕円形を呈し、深さ9cmを測る。

土坑19(SK19)

DW-44に位置し、106×86cmの不整形で、深さ26cmを測る。



挿図6 土坑08～22

0 1m

土坑20(SK20)

DV-43に位置し、110×90cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。

土坑21(SK21)

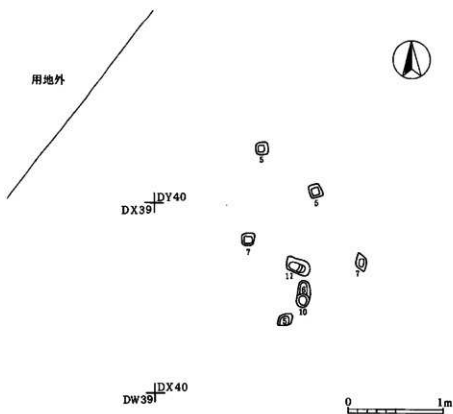
DV-47に位置し、75×(33)cmの楕円形を呈し、深さ21cmを測る。およそ半分は調査区外である。

土坑22(SK22)

CA-43に位置し、63×46cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。

(3) 小穴(挿図7 図版4)

DX-40を中心に、一辺10~20cm、深さ5~11cmの小穴を8基確認した。市内の類例からして、中世から近世にかけての柱穴である可能性がある。しかし、周辺は既に削平された箇所もあり、遺存状態が良くない。そのため、具体的な建物の規模や構造を把握することはできなかった。



挿図7 小穴

(4) 不明遺構(挿図8 図版4)

不明遺構02(SX02)

DW-41を中心に位置し、330×192cmの楕円形を呈す。トレンチで確認した部分の深さは、34cmを測る。当初は住居址の可能性があったが、その可能性は低い。ローマウインドの可能性が挙げられる。

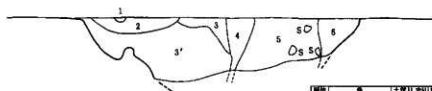
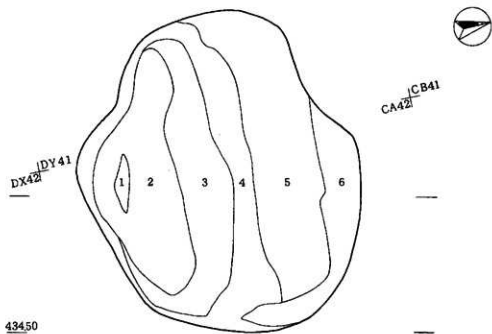
不明遺構03(SX03)

DY-46を中心に、部分的に硬化した地面を確認した。地山を叩き締めた状態であるが、粘土等を貼り付けているものではない。規模は350×146cmの範囲で、8号溝址・9号溝址に切られる他、削平も受けているものとみられる。柱穴や周溝、炉址といった施設は確認できなかったため、住居址の貼床である可能性は低いといえる。時期、性格ともに不明である。

第4節 遺物(挿図9)

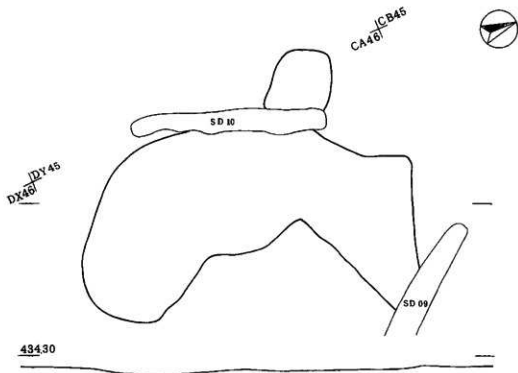
いずれも遺構に伴って出土したのではなく、遺構の時期や性格を決定するものとはならない。1は土師器の高杯の一部である。表面はにぶい黄橙色を呈す。花崗岩に起因するとみられる、径3mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。全体的に摩滅しており、調整方法等は不明である。古墳時代以降のものともみられる。2は底径6.6cmを測る壺または甕の底部である。表面は明赤褐色～灰褐色を呈し、焼成は良好で堅い。胎土は花崗岩に起源をもつとみられる径3mm以下の長石等を多く含み、粗い。形態からして、弥生土器の底部とみられるが、胎土は弥生時代よりも古墳時代以降の土師器に近い。3は、底径11cmを測る須恵器の杯の底部である。底部はヘラ削りとみられる。青灰色を呈し、3mm以下の長石粒子を含んだ比較的粗い胎土で、在地(伊那谷)で生産されたものとみられる。全体の器形が明らかでないが、奈良時代のものともみられる。4は、底径6.6cmを測る須恵器の杯の底部である。オリブ灰色を呈し、良好な焼成である。径1mm以下の長石粒子を僅かに含む、精錬された胎土である。全体的に摩滅しており、調整方法等は不明である。形態からみて、奈良～平安時代(8～9世紀前半)のものともみられる。

5は石皿である。花崗岩製で、19.4×20.4×5.5cm、重さ3.3kgを測る。粒子の粗い花崗岩製である。表面は全体的に風化、摩滅しており、中央よりやや下寄りが深さ1.5cm程度くぼんでいる。6は黒曜石製の石鏃である。(19)×(11)×3mm、重さ1gを測る。脚部を僅かに欠損するが、ほぼ完形に近い。押圧剥離で丁寧成形されている。いずれも縄文時代の石器と考えられる。



SX 02

層	名	土質	色	厚	特徴
1	100%2	赤褐色	SC	0.1	△
2	100%2	黒	SC	0	△
3	100%2	赤褐色	SC	0	△
4	100%1	黒	SC	△	△
5	100%1	黒	SC	△	△
6	100%1	赤褐色	SC	△	△
7	100%1	赤褐色	SC	0	△



SX 03



挿図8 不明遺構02・03

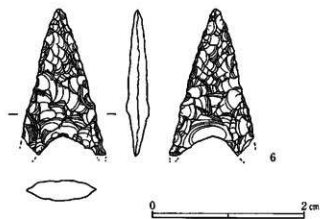
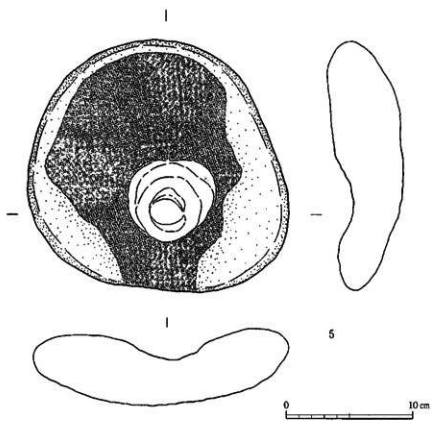
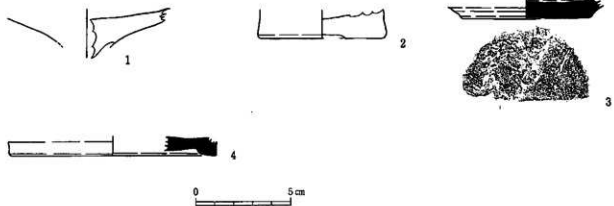


插图9 出土遗物

第IV章 調査のまとめ

今次調査で確認された内容は以上のとおりであるが、今次調査で得られた当遺跡の所見をまとめ、総括としたい。

北側隣接地での発掘調査では、北側の土曾川の氾濫原と西側の湿地帯に挟まれた微高地上に遺構が濃密に分布していることが確認されている。今次調査区では建物址等を把握するに至らず、どのような集落構造であったかは不明な点が多い。過去に削平されていたことも考慮せねばならないが、全般的に遺構等の分布が希薄であり、特に南側ではその傾向が強く、北側で比較的遺構が多い。これらのことと北側隣接地の調査結果を合わせると、今次調査区は、集落域の南限といえる。

当遺跡より南東側には、自然堤防上に立地する飯沼堂垣外遺跡と飯沼丹保遺跡が続いており、飯沼堂垣外遺跡と飯沼丹保両遺跡の間には、湿地が谷状に入り込んでいる。今次調査区南東側では、全体的に傾斜が強くなり、土も水気が多い。ちょうど、今次調査区は、飯沼堂垣外遺跡と飯沼丹保遺跡の間にある湿地帯の谷頭に当たるものとみられ、湿地帯は生産域として土地利用されていたものとみられる。

当遺跡周辺で最も特筆すべきは律令期であり、約1km離れた座光寺地区恒川遺跡群に伊那郡衙が設置されたことである。そして、隣接する飯沼堂垣外遺跡では掘立柱建物址、竪穴建物址が確認され、三彩陶器や円面鏡などといった特殊な遺物が出土したことから、伊那郡衙に関連する有力者層の集落址と捉えられていることである。今次調査区は比較的狭いことに加え、上述したとおり造成により既に一定の削平を受けていることにより、全体的に遺構の残りは悪く、遺構の構造や性格を把握することができなかった。北側隣接地では、古墳時代後期、6世紀後半から7世紀にかけての遺構が最も多く、12軒の竪穴建物址と3棟の掘立柱建物址が確認されており、続いて平安時代の土坑がわずかに確認されている。今次調査区内の遺構も、北側隣接地と周辺の状況と出土遺物の年代を考慮すれば、古墳時代後期から平安時代にかけての所産である可能性が最も高い。そして土坑は、柱痕等は確認されなかったものの、掘立柱建物址を構成する柱穴の一部である可能性も考えられる。

なお、溝址の性格は不明な点が多い。飯沼堂垣外遺跡でも集落の縁辺部に溝址が多く確認されている点は、集落構造として参考となるが、溝址の時代等は弥生時代から近代に至るまで様々で特定できない。

遺物では、縄文時代の石器である石皿、石鏃が出土している。当遺跡では北側隣接地において、縄文時代晩期の土器片が出土しており、隣接する飯沼丹保遺跡では縄文時代中期の住居址が2軒確認されている。さらに同一の立地に位置する恒川遺跡群では、縄文時代早期からの集落の痕跡が確認されている。今次調査で出土した縄文時代の遺物と周辺の調査状況を考慮すれば、付近に縄文時代の集落等が存在したことはほぼ間違いない。

ママ下遺跡は比較的大規模な複合遺跡であり、上郷・座光寺地区、ひいては伊那谷の古代社会を考える上で欠くことのできない遺跡である。担当者の力不足が大きく、遺跡の内容を十分に解明することができなかったことは遺憾であるが、調査の結果は重要である。近年、伊那谷の古墳文化とそれに続く古代伊那郡衙の様相が明らかになりつつあり、そして地方豪族の集落や末端官衙の様相について新たな

課題として挙がっている。こうした中で恒川遺跡群の周辺に位置する当遺跡の意義も以前より増しており、当遺跡のような古代社会の集落構造を解明することは、今後に残された大きな課題といえる。

最後になりましたが、今回の発掘調査を実施するにあたり埋蔵文化財の保護に多大なるご理解をいただきました、株式会社甲信マツダ様には、厚く御礼申し上げます。

《主要参考・引用文献》

- 下伊那地質誌編集委員会 1976 『下伊那の地質解説』
上郷史編集委員会 1978 『上郷史』
飯田市教育委員会 1994 『堂垣外・橋爪・藪上・長橋遺跡』
長野県飯田市教育委員会 2003 『ママ下遺跡』
長野県飯田市教育委員会 2007 『飯田における古墳の出現と展開』
長野県飯田市教育委員会 2007 『恒川遺跡群 官衙編』

調査区(北側)



調査区(南側)



溝址08





溝址09



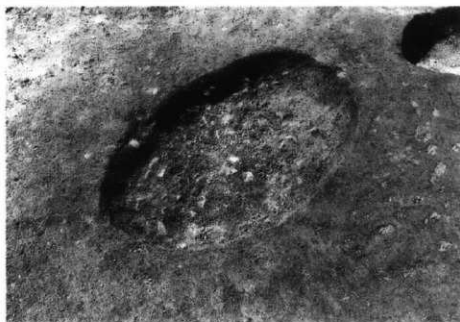
溝址11



土坑09



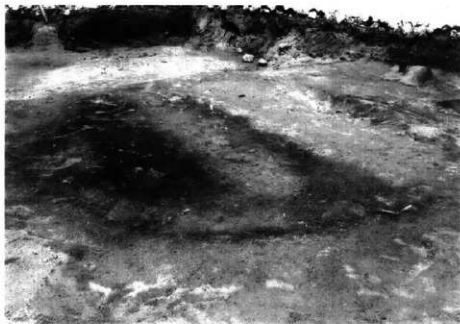
土坑15



土坑17



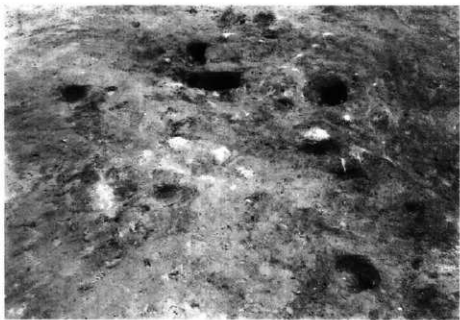
土坑22



不明遺構02



不明遺構03



小穴



作業風景



出土遺物(石皿)



出土遺物(石鏃)

報告書抄録

ふりがな	まましたいせき							
書名	ママ下遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	羽生 俊郎							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 TEL0265-22-4511							
発行年月日	西暦2008年3月(平成20年3月)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村 遺跡番号						
まましたいせき ママ下遺跡	いいたしかみさといいたま 飯田市上郷飯沼 1420-1	20205		35° 31′ 25″	137° 51′ 24″	平成18年 5月8日 ～ 平成18年 5月30日	208㎡	工場建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
ママ下遺跡	集落址	縄文時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 中近世		溝址 土坑 柱穴		土器・石器		
要約	土管川の自然堤防上に立地する古墳時代後期から平安時代を中心とした集落の南限が確認された。							

マ マ 下 遺 跡

2008年3月発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534
飯田市教育委員会

印刷・製本 ヨシザワ印刷株式会社

